59 I regret to say that your offer is not acceptableという発話からわかること

（1）のように，we regret to say that（残念ですが）と話し手の共感の気持ちを聞き手に表すことで，「ワンクッション」置き，次いで聞き手の思いを拒否するといった否定的な事柄を伝える表現方法がある。これはビジネスメールのフォーマルな表現として，英語だけではなく，日本語にも見られる。

（1）**We regret to say that** your offer is not acceptable.

（物産研修センター編，ワグナー他 1988: 122）

（2）**I'm afraid** I won't be able to accommodate your request.　（島岡 1996: 168）

このI regret to sayやI'm afraidのような言い方は**緩衝的な垣根表現（hedge）**と呼ばれる。安井（1996: 337）によると，垣根表現は何らかの観点から記述の断定性を弱める働きをし，文内容の事実性に対する話者のためらいや確信のなさ，表現の婉曲性，丁寧さなどの効果を意図した表現である。このような表現には，評言節（comment clause）のI think, I hear, they say, 副詞（句）のperhaps, roughly, loosely speaking, in one senseなどがある。

（1）では，we regret to say thatが補文（従属節）のI cannot accept the offerという意味内容に対してためらいとか感情的態度を表すことになるため「緩衝的」である。このような語句は「垣根」の機能を果たし，聞き手に直接，否定的な事柄を伝えて不愉快な思いをさせるのを避けるようにする。つまり，「垣根」という用語は聞き手に否定的な事柄を直接伝えるのを避け，「ワンクッション」置くための機能を表す比喩的な言い方として捉えることができる。もっと言うと，聞き手にとって不愉快であり，否定的だと思われる事柄を伝える場合，（1），（2）のように，I regret to sayやI'm afraidのような垣根表現は聞き手への共感の気持ちを表すことで，聞き手にとって後続する不愉快かつ否定的な伝達内容を和らげる働きをする。

ところで，（1），（2）では，垣根表現に後続する補文（従属節）はnotによって否定されている。しかし，次の（3），（4）では，この聞き手にとって不愉快かつ否定的な意味内容を表す補文内容はunableを使い，肯定的な表現になっている。つまり，否定的な意味内容をある意味でぼかすような表現になっている。（（4）では，垣根表現は（1），（2）と異なり，副詞句で表されている。）

（3）We regret to inform you that we **are unable to** offer you the job.

（Murphy 1994: 110）

（4）To our regret, we **are unable to** accept your order at the price requested: £25 per 1,000.　（King and Cree 1979: 49）

（1），（2）の垣根表現の後には，聞き手にとって不愉快であったり，notによる否定的な事柄を伝える意味内容が必然的に続くため，当然，話し手はその伝達形式に気を遣うことになるはずである。それでは，垣根表現に後続する補文に（3），（4）のようなbe unable toを用いた場合と，次の（5），（6）のようなcannotを用いた場合ではどのような意味の違いが表れるのだろうか。

（5）We regret to inform you that we **cannot** offer you the job.

（6）To our regret, we **cannot** accept your order at the price requested: £25 per 1.000.　（以上，松倉 2002: 70-71）

松倉（2002: 70-71）はこの違いについて英語母語話者6人（アメリカ人4人，カナダ人2人）に質問した。その結果，5人がcannotよりもare unable toを用いた方が婉曲的で，丁寧な言い方だと答えた。その一方で，1人（アメリカ人）だけが（3），（4）の方が（5），（6）よりも丁寧ではあるが，（4）と（6）では，（6）のcannotを用いる方が直接的ではあるが，丁寧な言い方で，（4）のようにare unable toを用いると，冗長的であいまいであると述べた。

一般に，be unable toはcannotと等しい表現だと見なされている。しかし，例えば（3）と（5）において，be unable toとcannotの違いは，（3）の接頭辞un-がare unable toの中のableのみを否定しているのに対して，（5）の否定語notはwe can offer you the job全体を否定している。つまり，（3）のwe are unable to offer you the jobは肯定文であり，（5）のwe cannot offer you the jobは否定文という点で対照的である。この肯定と否定という捉え方の違いがおそらく（3）の方が（5）よりも聞き手にとって婉曲的で丁寧な表現として感じられる理由ではないだろうか。ただし，これは少数の例のみを検討した結果に過ぎないため，今後さらに詳細な検討が必要である。

（松倉　信幸）